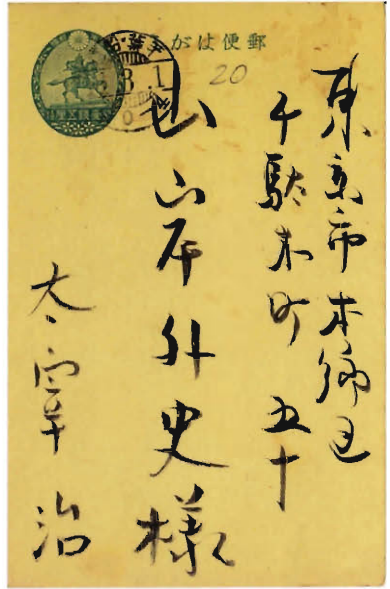


昭和11年（1936年）3月1日（消印）

ユギトの詩を讀んだ。  
はぢらひ  
含羞のふきは兄の  
美質でさ（あらう）。  
ためらはずに進み  
玉ふやう祈る。



コギトの詩を読んだ。含羞はぢかのなきは、兄の美質でさへあらう。ためらはずに進み玉ふやう祈る。

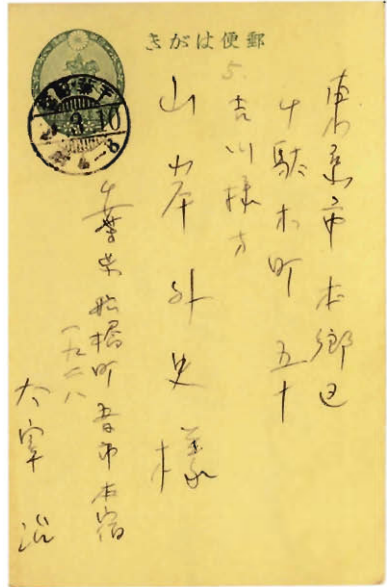
東京市本郷区千駄木町五十 山岸外史様  
太宰治

【フート】

コギトの詩——山岸外史「満月歌」(「コギト」昭和十二年三月)。

昭和11年(1936年) 3月10日 [消印]

きみに <sup>さんど</sup>三度、無言の御返事をさし  
あげた。三種三様の無言なのね。  
それは、君の知つて居るとほりであ  
る。君の三枚の葉書が、どれほど  
の手紙へ <sup>ごた</sup>があつたか、それも、君  
の推察どほりだね。あそらく、ちがつて  
はおぬあいらう。堀 <sup>ほり</sup>に石を投じて、  
堀の深さをはかる。きみは、堀の深  
さを はかり 当てた。 <sup>こま</sup>びに來ておたれ。

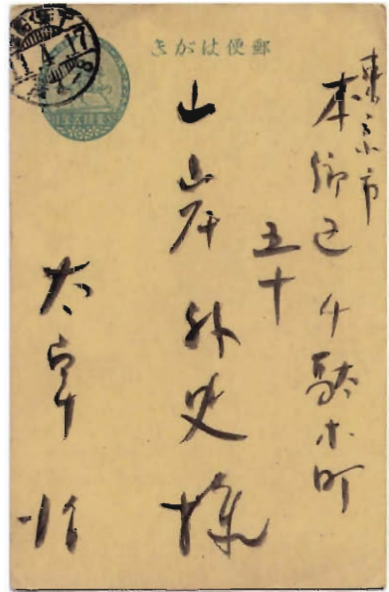


きみに三度、無言の御返事をさしあげた。三種三様の無言なのだ。それは、君の知つて居るとほりである。君の三枚の葉書が、どれほどの手応へがあつたか、それも、君の推察どほりだ。おそらく、ちがつてはあないだらう。堀に石を投じて、堀の深さをはかる。きみは、堀の深さをはかり当てた。遊びに来てお呉れ。

東京市本郷区千駄木町五十 吉川様方 山岸外史様  
 千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

昭和11年（1936年）4月17日（消印）

うの後 心なき中して  
 ぬきす 新作集の校  
 正で らんらん にか  
 く、明日の工曜は北ひ  
 よつとしやら 不在かも  
 しれぬ  
 ゲルニ三日中にお返し  
 下さりませぬ  
 取急  
 知念



その後ごぶさた申してゐます。創作集の校正でたいへん  
いそがしく、明日の土曜日も、ひよつとしたら不在かもしれ  
ぬ

ゲル二三日中にお返しできます。取急ぎお知らせ迄

東京市本郷区千駄木町五十 山岸外史様  
太宰治

【校異】

ごぶさた申してゐます。〔全集〕 → ごぶさた申してゐます

不在かもしれぬ。〔全集〕 → 不在かもしれぬ

お返しできます。〔全集〕 → お返しできます

〔改行〕取急ぎお知らせ迄。〔全集〕 → 〔改行なし〕取急ぎお知  
らせ迄

【フート】

創作集——太宰の最初の創作集「晩年」（砂子屋書房、昭和十一年  
六月）。

ゲル——ドイツ語の Geld（金銭）。学生用語で「ゲル」と言った。

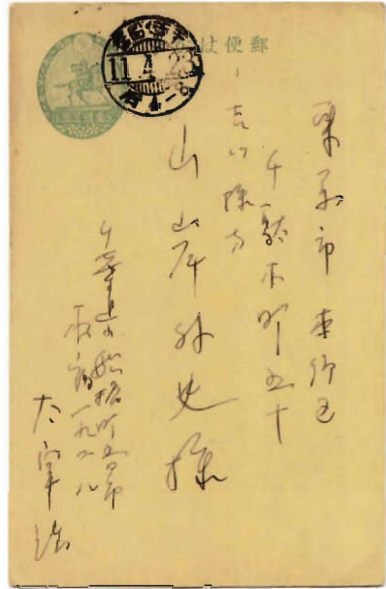


昭和11年(1936年) 4月23日(消印)

(第ニ信)

あんなには、重大なミスプリント  
さへあります。

第一信のやうな、あんな、それかくしの面白く  
満面の微笑を、わざと書きしめたの、さて、  
押入れよりさがし出して、また読みなほ  
した。と、わけです。一読を、書き、おぼ  
しめたのです。それ、井伏さんの奥さまの、あつて  
の、お話を、お話し相手、したから、それでも書き  
あげて、いやいしました。それ、お話し相手、  
話にもなるし、なうぬほど、粗末な、個所あり、  
は、冷水三斗の、実感、あります。右が、手を添え  
て、書き、いたのだから、  
あつた。いま、  
夜の、め、ぬられぬ。これは、自信が、  
新村兄への、これは、この小説の、



(第二信)

第一信のやうな、あんな、てれかくしの面白くもない返事を、わざと書きしたため、さて、満面の微笑、どれ、どれ、と「若草」、押しれよりさがし出して、また読みなほしたといふわけです。一夜で書き飛ばしたのです。それも、井伏さんの奥さまのおいでで、お話相手しながら、それでも書きあげてしまひました。それゆゑ、いま読むと、話にもなにもならぬほど粗末な個所あり、背中に冷水三斗の実感あります。君が手を添えて書いたのだから、いつさう君の氣にいつたのではないかしら。いま、月末までの約束で、某誌の小説。夜のめもねられぬ。これは、自慢があります。ぜひとも読んでもらひたい。津村兄へのゲルは、この小説のお金からおかへしする

あれには、重大なミスプリントさへあります。

東京市本郷区千駄木町五十 吉川様方 山岸外史様  
千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

【校異】

手を添へて〔全集〕 → 手を添えて

いつさう〔全集〕 → いつさう

おかへしする。〔全集〕 → おかへしする

【ノート】

「若草」——「若草」昭和十一年五月発表の「雌に蹴いて」。「私」が「客人」に、憧れの女性像を語る話だが、「客人」のモデルは山岸外史。山岸は「太宰治おぼえがき」で、二人の対話を「ほとんどそのままを誤らずに文章にしていた」と書いている。

「某誌の小説」——「東陽」昭和十一年十月発表の「狂言の神」。

津村兄——津村信夫。



昭和11年(1936年) 4月27日 [消印]

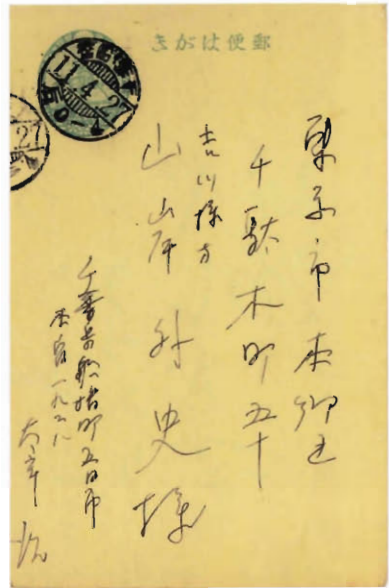
昨日は、大い～癪かしてね。  
 ので、しつれい、しまし。

ちいていの癪かあら、何くそと  
 ぶんぼつて、知らんかりをしておるもの  
 一と。よほどの癪かた、  
 印はるゝ家ありん。あの前夜、  
 二晩、ほとんご徹夜で、仕事をした。

ぶんぼつておくとおろに大急が来た、  
 ても、僕の昨夜の退土のすかちあ、たい  
 よかつた。名が、高飛が去りても、あとを溜ます。

へん

へん



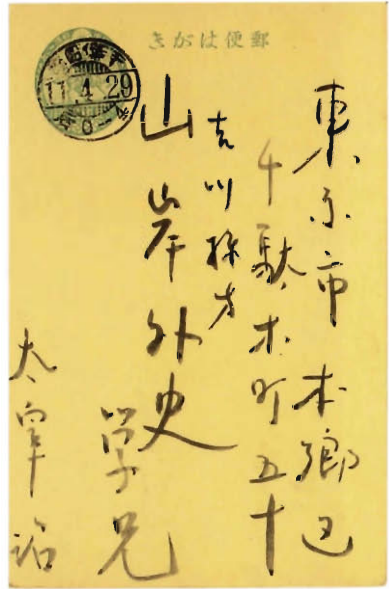
昨夜は、大いに疲労してゐたので、しつれい、しました。たいていの疲労なら、何くそとふんばつて、知らんふりをしてゐるものでした。よほどの疲労と、御賢察ありたい。あの前夜、二晩、ほとんど徹夜で、仕事をした。ぐつたりしてゐたところに大兄が来た。

でも、君の昨夜の退去のすがたは、たいへんよかつた。名禽めい飛び去りても、あとを濁さずと言ふやうな感あり。スガスガしかつた。

東京市本郷区千駄木町五十 吉川様方 山岸外史様  
千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

昭和11年（1936年）4月29日（消印）

見日は、えもよ遠くふり  
 さふ、腹痛で、そりへ  
 場が二人も来て、ふとり  
 は八年ぶりの（會合）落  
 ちついで話もできず、君  
 さうつかり逃がしてしまつて  
 くやしかつた。小説もう  
 日くらおで完結の見込め  
 ほそのときあかへしする。病むやや



先日は、気も遠くなりさうな腹痛で、そのうへ甥が二人も来て、(ひとりには八年ぶりの会合) 落ちついた話もできず、君をうっかり逃がしてしまつて、くやしかつた。小説、もう四日くらゐで完成の見込み。ゲルはそのときおかへしする。病ひややよし。

こんどは必ず寝物語の覚悟で来て下さい

東京市本郷区千駄木町五十 吉川様方 山岸外史字兄  
太宰治

【校異】

逃がしてしまつて〔全集〕 → 逃がしてしまつて、  
 (縦線なし)〔全集〕 → (縦線あり)  
 来て下さい。〔全集〕 → 来て下さい

昭和11年（1936年）5月3日（消印）

拝復。

新井村の住所は、本並

の阿佐ヶ谷ニ一五九六ニ

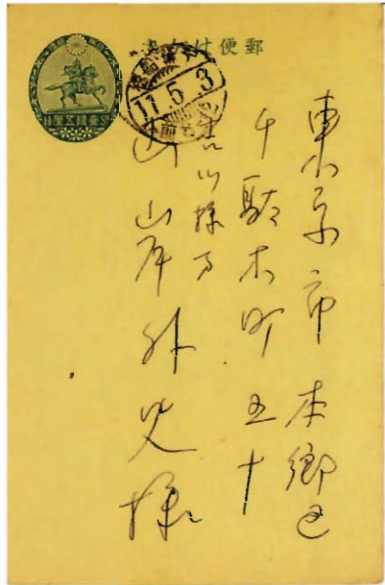
す。中心街ニ

は、<sup>ハ</sup>徹たる作に

お答へ申す。いま、甚

吟、五六日お待ち下さい。

私の能く度々の<sup>お</sup>まかして下さる。



【校異】

拝復〔全集〕 → 拝復。

二ノ五九六〔全集〕 → 二ノ五九六、

拝復。

外村繁氏の住所は、杉並区阿佐ヶ谷二ノ五九六、です。御忠告については、儼たる作品にて、お答へ申します。いま、苦吟。五六日お待ち下さい。

太宰治

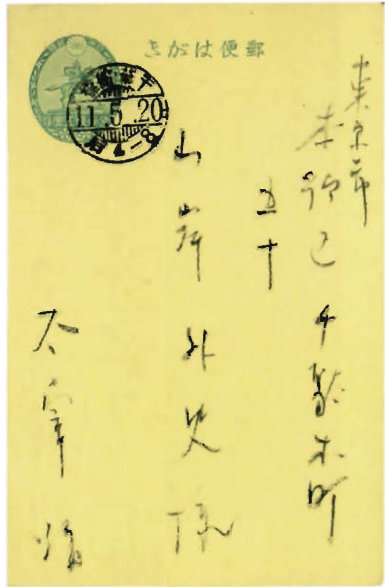
私の態度の謎がとけます。

東京市本郷区千駄木町五十番 吉川様方 山岸外史様



昭和11年(1936年) 5月20日(消印)

澤純の「ふらり」の作を解一讀  
 ジぶさん中しよしん小説  
 「板」の脚し 四十二枚、完結  
 「むい」の「空想構の塔」(假題)  
 六十枚の完成に交、書一つと  
 めて居りし事、今日中の十  
 切なもので、なほ三十一日まで  
 に「ふらり」の「新脚」へも書  
 く約束ありし事。



謹啓

ごぶさた申しました 小説「狂言の神」四十二枚、完結、  
 ただいま「虚構の塔」(仮題)六十枚の完成に夜、昼、つと  
 めて居ります、今月中のメ切なのです、なほ三十一日までに  
 「文藝」と「新潮」へも書く約束いたしました。  
 これら四篇の作品御一読のうへ、私を見直し玉へ

東京市本郷区千駄木町五十 山岸外史様  
 太宰治

【校異】

ごぶさた申しました。(全集) →ごぶさた申しました  
 つとめて居ります。(全集) →つとめて居ります、

「文藝」と、「全集」 → 「文藝」と

これから(全集) →これら

見直し玉へ。(全集) →見直し玉へ


【フット】

「虚構の塔」(仮題) —— 「虚構の春」(「文学界」昭和十一年七月)。  
 山岸外史「太宰治おぼえがき」には、「これらの小説の主人公のな  
 かには、あきらかに、ほくを使ったものがあって、ほくへの抵抗  
 を示している」とある。


昭和11年(1936年) 6月24日 [消印]

陸君

河邊君のオハガキを拝見から

いんどうき、けさのオハガキ、はじめは  兄の

いたはりの あんなかいもの 見せて

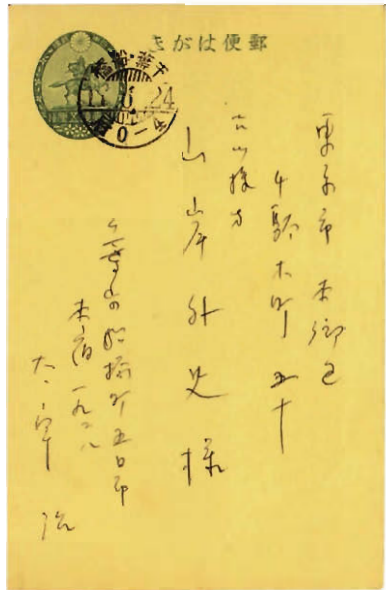
いんどうき、あんなかいもの。 じいんの友情  は、

おまひ 審判、じいんの他の、やさしい

いんどうき、あんなかいもの。 仕事、(の) 好きなことを 欲し

く 思ふつて おまひ、あんなかいもの。 君は、やはり

私の よい友人、いんどうき、あんなかいもの。 毎日。



謹啓

何百枚かのオハガキを貴兄からいただき、けさのオハガキ、はじめて兄のいたはりのあたたかいものを見せていただきました。真の友情には、お互ひ審判、叱正の他に、やさしいいたはりと仕事への敬意を欲しく思つておました。君は、やはり私のよい友人であつた。

敬白。

東京市本郷区千駄木町五十 吉川様方 山岸外史様  
千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

【校異】

あたたかいもの、「全集」——あたたかいもの  
敬白〔全集〕——敬白。

昭和11年(1936年) 6月24日 [消印]

三郎 道化の華  
狂言の神

どうやら百鬼夜行(まじな)  
虚構の物語 四白枚

足のかたにこのまじ、(虚構の春、改題)  
ちかびろになく 涙えて居る

らしい。 あのおんかきで、 兄のモスセ

れむむ、  
~~あつち~~ 意志的

のきしき、  
風説 アウフ

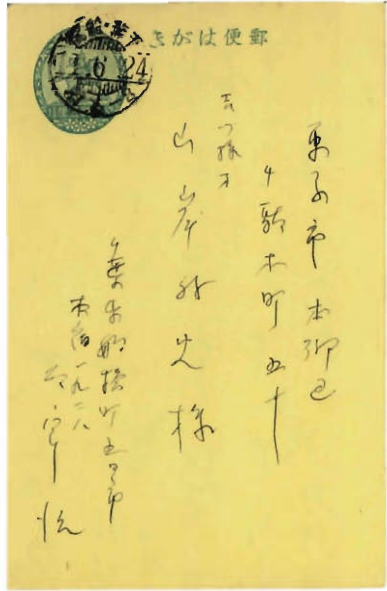
エバン。 本巻の安切りのやうにさへ

見えまわ。 よほど、文章 習練レ

な様です。 泣き込んで居る。 以後も

断々 御採とた 下さい。 思ひ出レは、

文章界の小説は、大いに書き和(な)ければいけないです。



三部曲 道化の華  
狂言の神

架空の春、(虚構の春、  
改題) どうやら百点もらへさうだ  
「虚構の彷徨。」四百枚。

兄の心境ちかごろになく冴えて居るらしい。あのオハガキで、兄のモオゼたらむ念願、意志的のぎしぎししたる風貌よりアウフヘエベン。本然の姿勢のやうにさへ見え来た。よほど、文章習練した様です。澄んで居る。以後も、爾々御採点下さい。「思ひ出」は？  
「文学界」の小説は、大いに書き加へなければいけないのです。

【校異】

架空の春〔全集〕 → 架空の春、

〔架空の春(虚構の春、改題)〕の次行) どうやら百点もらへさうだ。〔全集〕 → 〔「虚構の彷徨。」〕の右の行) どうやら百点もらへさうだ

〔架空の春(虚構の春、改題)〕の次行) 四百枚。〔全集〕 → 〔「虚構の彷徨。」〕の下)

「虚構の彷徨」〔全集〕 → 「虚構の彷徨。」

(縦線なし)〔全集〕 → (縦線あり)

兄の心境、〔全集〕 → 兄の心境

見えて来た。〔全集〕 → 見え来た。

東京市本郷区千駄木町五十 吉川様方 山岸外史様  
千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

(改行なし)「文学界」の〔全集〕 → (改行)  
【フート】

「虚構の彷徨。」——作品集『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ』(新潮社、昭和十二年六月)。「虚構の彷徨」の題のもとに「道化の華」「狂言の神」「虚構の春」を収録し、「ダス・ゲマイネ」を付ける。「文学界」の小説——「虚構の春」(「文学界」昭和十一年七月)。